

武蔵野日曜集会

来たりて見よ

――ヨハネ伝第1章35～51節――

1967年7月9日（武蔵野）

小池辰雄

神の羔 イエスの顧み 来たりて見よ あるがままの自分を投げ出す 「真実」 言霊我を見よ
 なんじは神の子なり 神の使 霊的な現象 無即無限 天門 来たりてわがうちなるキリスト
 を見よ

【ヨハネ1・35～51】

³⁵ 明くる日ヨハネまた二人の弟子とともに立ちて、³⁶ イエスの歩み給うを見ていう『視よ、これぞ神の羔羊』³⁷ かく語るをききて二人の弟子イエスに従いゆきたれば、³⁸ イエス振反りて、その従いきたるを見て言いたもう『何を求むるか』彼等いう『ラビ（訳きていえば師）いずこに留り給うか』³⁹ イエス言い給う『きたれ、然らば見ん』彼ら往きてその留りたもう所を見、この日ともに留れり、時は第十時ごろなりき。⁴⁰ ヨハネより聞きてイエスに従いし二人のうち一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレなり。⁴¹ この人まず其の兄弟シモンに遇い『われらメシヤ（訳けばキリスト）に遇えり』と言いて、⁴² 彼をイエスの許に連れきたれり。イエス之に目を注めて言い給う『なんじはヨハネの子シモンなり、汝ケパ（訳けばペテロ）と称えらるべし』

⁴³ 明くる日イエス、ガリラヤに往かんとし、ピリポにあいて言う『われに従え』⁴⁴ ピリポはアンデレとペテロとの町なるベツサイダの人なり。⁴⁵ ピリポ、ナタナエルに遇いて言う『我らはモーセが律法に録ししところ、預言者たちが録しし所の者に遇えり、ヨセフの子ナザレのイエスなり』⁴⁶ ナタナエル言う『ナザレより何の善き者かいづべき』ピリポいう『来りて見よ』⁴⁷ イエス、ナタナエルの己が許にきたるを見、これを指して言いたもう『視よ、これ真にイスラエル人なり、その衷に虚偽なし』⁴⁸ ナタナエル言う『如何にして我を知り給うか』イエス答えて言いたもう『ピリポの汝を呼ぶまゑに我なんじが無花果の樹の下に居るを見たり』⁴⁹ ナタナエル答う『ラビ、なんじは神の子なり、汝はイスラエルの王なり』⁵⁰ イエス答えて言い給う『われ汝が無花果の樹の下におるを見たりと言いしに因りて信ずるか、汝これよりも更に大なる事を見ん』⁵¹ また言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、天ひらけて人の



子のうえに神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし』

●神の羔

35 明くる日ヨハネまた二人の弟子とともに立ちて、

洗礼のヨハネが自分の弟子たちと共に、

36 イエスの歩み給うを見ていう『視よ、これぞ神の羔羊』³⁷ かく語るをききて二人の弟子イエスに従いゆきたれば、³⁸ イエス振反りて、その従いきたるを見て言いたもう『何を求むるか』彼等いう『ラビ（釈きていえば師）いずかに留り給うか』³⁹ イエス言い給う『きたれ、然らば見ん』彼ら往きてその留りたもう所を見、この日ともに留れり、時は第十時ごろなりき。

午後四時頃になります、

40 ヨハネより聞きてイエスに従いし二人のうち一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレなり。⁴¹ この人まず其の兄弟シモンに遇い『われらメシヤ（釈けばキリスト）に遇えり』と云いて、⁴² 彼をイエスの許に連れきたれり。イエス之に目を注めて言い給う『なんじはヨハネの子シモンなり、汝ケパ（釈けばペテロ）と称えらるべし』

非常に簡単な問答であります。洗礼のヨハネが、

「やがて自分のあとから驚くべき人がやってくる。いや、実にあなた方の間にいるのだ」

ということを前に言いました。

36 イエスの歩み給うを見ていう『視よ、これぞ神の羔羊』
「世の罪を除く神の羔である」

と。「羔」ということはもちろん、贖罪の意味を持った言葉であつて、生贄となつて疵なき者が疵ある者の、その疵を、罪を、咎を自分で背負つてしまう。赦すということは、自分ができるがなければ本当の赦しにはならない。私たちは人を許すことは、相対的な意味ではできませんけれども、キリストのような意味において人の罪を赦すということは、我々には不可能です。というのは、我々自身が罪を負っている者ですので、人の罪を負うことはできない。

これができるのは、自らが罪にさらされながら、危機的存在でありながら、完全に罪に打ち勝ち、また万人が死ななければならぬその死に打ち勝った、霊的な生命として甦ったところのキリストだけがこのことをなし得るのです。

「これぞ神の羔」

という、洗礼のヨハネが宣言したところの言葉は非常に断然たる言葉であります。



●イエスの顧み

37 かく語るをききて二人の弟子イエスに従いゆきたれば、^{ふりかえ}38 イエス振り返りて、その従いきたるを見て言いたもう『何を求むるか』

「キリストが振りかえる」

という言葉がところどころに出てきます。マグダラのマリヤが復活のキリストにでつくわしたところにも――それがイエスであることがまだ分からなかったけれども――イエスが振り返って、

「マリヤよ!」

と呼んだときに、初めてそれがキリストであることを知ったというくだりがありますが。キリストの顧みですね。イエスの顧みという。我々が日常生活においてキリストに顧みられている。キリストは先頭をきつて歩いていますが、時々、果たしてついて来ているかというわけで、我々を顧みてくださるということがあるわけでしょう。

「何を求めるか」

と。口語訳では、「何か願いがあるのか」とある。「何を汝らは探しているか」ということ。「求めるか」で結構ですが。

彼等いう『ラビ(釈きていえば師) いずこに留り給うか』

この「留まる」という字が例の「宿る」という、その中に深く居るといような「メネイン」という字です。「どこにお宿りになりますか」というわけです。

39 イエス言い給う『きたれ、然らば見ん』

「きたれ、そうしたら、お前たちは見るだろう。わかるだろう」と言ったところが、

彼ら往きてその留りたもう所を見、この日ともに留れり、時は第十時ごろなりき。

キリストと同じ宿の中に入ったと。

40 ヨハネより聞きてイエスに従いし二人のうち一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレなり。

ヤコブとヨハネそしてアンデレとペテロと、この四人が最初に弟子になるわけです。このヨハネはもちろんヨハネ伝を書いたヨハネ、使徒ヨハネです。今このことを書いているのがそのヨハネです。ヨハネが「洗礼のヨハネ」のことを語っているわけです。ヨハネ伝というものが一時は、使徒ヨハネではないというような相当否定的な批評学があった時がありますが、この頃の学問ではむしろこの使徒ヨハネがヨハネ伝を書いたという、ヨハネ書簡も黙示録もみなヨハネであるという結論が勝っているようです。私もそうだと思っています。

41 この人まず其の兄弟シモンに遇い『われらメシヤ(釈けばキリスト)に遇えり』
42 彼をイエスの許に連れきたれり。



即ち、洗礼のヨハネが「神の羔」とハッキリ言いましたので、これを信じて即ち、「メシヤ、キリストに遇った」と。

イエス之に目を注めて言い給う

「目を注めて」と言うときには、特によくその本質を見るわけです。キリストのような方はもちろん、人を一目でもってその本質が見抜けるような人ですから。本質ばかりでなくて、一体どこの誰か、今までに何をしていたか、というようなことまで見透しのきく人です。何を思っているかと。まあ驚くべき人物であります。

『なんじはヨハネの子シモンなり、汝ケパ(釈けばペテロ)と称えらるべし』

「ペテロ」という名には特別な意味が含まれているけれども、ここではそのことは出てません。

●来たりて見よ

43 明くる日イエス、ガリラヤに往かんとし、ピリポにあいて言う『われに従え』

いきなり、

「私について来い」

というようなことを言われる。問答も無用であります。

44 ピリポはアンデレとペテロとの町なるベツサイダの人なり。

ガリラヤの北の方です。

45 ピリポ、ナタナエルに遇いて言う

ナタナエルというのはナザレに割合近い所の――その次にカナの婚宴のことが出てきますが――カナの人です。ナザレがキリストの故里ですけれども。

『我らはモーセが律法に録ししところ、預言者たちが録しし所の者に遇えり、

ヨセフの子ナザレのイエスなり』

「律法と預言者」という言い方は、言い換えると「旧約聖書」ということになる。即ち、彼らはもちろん「旧約聖書」なんて言わないので、「律法と預言者と諸書」という言い方をする。即ち、我々でいうと、

「旧約に預言されているところの人にぶつかった。ヨセフの子ナザレのイエスである」

ということ。もちろん、洗礼のヨハネというのは、ルカ伝の始めの方にも書いてあるとおり、キリストと不思議な間柄において生まれた人でありますので、キリストが特別な人であることはだいぶ早く知ってしまったわけだと思えます。

46 ナタナエル言う『ナザレより何の善き者かいづべき』

ナザレという町は別に大した町ではない。むしろ異邦的な色彩のかなりあった町らしいので、そんなところから善き者がでるか、イスラエル人らしい判断をしている。ベツレヘムのこととはミカ書にちよつと預言が出てますけれども、ナザレのことは出てない。もつとも、



「ナザレ人」「ナージール」というのは、特に神に選ばれる特別な人のことを「ナージール」と言うけれども、それと町の本質はだいぶ違うわけです。

ピリポいう『来りて見よ』

ところが、ピリポが「来たりて見よ」と言う。私は今日この「来たりて見よ」という題をここに掲げた。百聞一見に如かずという言葉があるとおおり、とにかく見なくてはいいかん。この「来りて見よ」というのは、ヨハネ伝4章のところにも、サマリヤの女がキリストにでつくわして驚いてしまつて、「こんな人は大変なひとだ」というので、

「²⁹「来りて見よ、わが^なをしし事をことごとく我に告げし人を。この人、或は

キリストならんか」(ヨハネ4・29)

「私の素性も、したこともみんな分かつてしまつて驚くべき預言者である」

と。自分が水を汲みにきたことも、水のことなんか忘れてしまつたようにして水瓶を残して、町のひとに

「さあ、来てごらん。えらい人にでつくわしたんだ」

というわけです。これも、ピリポが

「来たりて見よ。お前はそんなことを言うけれども、来てみる」

と言った。

●あるがままの自分を投げ出す

47 イエス、ナタナエルの己が許^{もと}にきたるを見、これを指して言いたもう『視よ、

これ真^{まこと}にイスラエル人なり、その裏^{うち}に虚偽^{いつわり}なし』

「ナザレから善き者なん出るか」

と自分が思ったことを率直に言っている。「そうかね」なんてまず言わないで、自分の意見をハッキリと言う。「そんなことがあるか」てなわけで。非常に正直なんです。

イエスという人とはにかく、体裁は嫌い。なにか分裂が嫌い。疑いはいいかん。思案はいいかん。とにかく、率直に自分を、あるがままの自分を――繕ったものはいかん――あるがままの自分を投げ出す人は、どんな人であっても、キリストは100%にこれを受けとつた。これはもう福音書を見るとハッキリしている。

だから、神の国に入る人はどういう人かというところ――何か少し準備してからではない――ダメなまんま、行き詰まつたまんま、分裂のまんま、疑いなら疑いのまんまでいい。今私は、「いかん、いかん」と言いましたけれども。実は、そのまま、現実そのもの――女の方はお化粧しますけれども――キリストはそのあるがままの姿を受けとってください。外側は多少お化粧したって――なにもお化粧するなと私は言うのではないけれども――心の世界は、本質そのものはそのまま打ち出していく。

もちろん、人間関係というものは、そのまますべて打ち出してものを言ったのでは、こ



れは正直始まらないという面もありますよ。自分の思っていることをすぐぶちまけてやったら、すぐ喧嘩になつてしまふだろうし、控えなければならぬ面もあります。そういうこととこのこととはちよつと別です。およそ、真理を求めるのは、相手は人間ではない。相手は神さまですから。詩篇139篇に書いてあるとおりです。

「エホバよなんじは我をさぐり我をしりたまえり。²なんじはわが坐るをも立つをもしり、又とおくよりわが念をわきまえたもう。³なんじはわが歩むをもわが臥すをもさぐりいだし、わがもろもろの途をことごとく知りたまえり。⁴そはわが舌に一言ありとも見よエホバよなんじことごとく知りたまえり。⁵なんじは前より後よりわれをかこみ、わが上にその手をおき給えり。⁶かかる知識はいとくすしくして我にすぐ、また高くして及ぶことあたわず。

神さまは端倪することのできない驚くべき全智である。全智全能というが、正に全智である。

⁷我いずこにゆきてなんじの聖霊をはなれんや。われいずこに往きてなんじの前をのがれんや。」(詩篇139・1～7)

すべて現前のことである。

「声前の一句千聖不伝」

という言葉が碧眼録の中にあります。声の前の一句は千の聖もこれを伝えることができないという。ところが、神さまは声前の一句をちゃんとご存じである。また、キリストはそうにして、詩篇139篇の神の如くに知っておられる。

しかしながらまた、地上におけるイエスはもちろんある意味において知らない。神にあつては、彼は示されれば、何ごとをも知る。手放して知るわけではない。

「我、何ごとをも教えることができない」

とイエスは言っている。不教なんです。自分では不教でもある。不伝でもある。伝えるわけにはいかん。不言でもあるし、不為でもある。けれども、キリストは、神の懷の中にいますから、神が伝えるし、神が教えるし、神が言うし、神が為すから。その神の力においてすべてその「不」の字がとれてしまう。

人間造りとか、「人間形成」とか、「人づくり」とか言つて、一生懸命でこの世の道德や哲学は、自己完成というわけで、自分を膨らませていく角度のことをやっている。ところが、宗教の世界は自己を滅却することから始まる。それが本当はその完成を来らせる。全然、その角度が逆である。だから、この世の教育というものは、どうしたつて、あるところまでしか行きつこない。ぶつかる。「自己、自己」というけれども、その自己が自我を、即ち我執的な自己をいくら伸ばしたつて、どうしてもこれは始まらない。我執的な自己をとつていく。即ち、小我から大我に移る。即ち、大我なら育てていかななくてはいけない。大我を育てていく。小我を殺しながら大我を生かしていくというのが本当の教育であるはずなんです。



●「真実」

キリストはそういう方で、ちゃんと人を見抜きながら、ものを言う。その見抜くというのは何かというと、審くために見抜くのではない。神に逆らっている者やサタン的な角度のものに対してはキリストは厳しい。サタンになめられては大変ですから。けれども、苦しみ求め、あがいている者には、もう限りなくこれを救っていいこうとする。

ピリピいう『来りて見よ』⁴⁷ イエス、ナタナエルの己が許にきたるを見、これを指して言いたもう『視よ、これ真にイスラエル人なり、その裏に虚偽なし』

という。「虚偽なし」ということは、別な言葉でいうと、「まことである」ということ。

「まことである」という、「真実」という言葉が、へたすると間違えられる。これは藤井先生が「真実」ということを非常に言われたわけですが、これも。

「信仰も偽りであつたらだめだ。信仰、信仰というけれども、自分は、信仰と真実とどちらを重んずるかという、真実を重んずる」

なんていうことを先生は言われたことがある。ところがまた、この藤井先生の言葉を持って回るような人があつて困る。そうすると今度は、その「真実」が何か自分の気持を統一して、「真実」という何かサムシングになつてしまう。「真実」が何ものかになつたらもうそれは真実ではない。だから、私はむしろ、先生が言おうとしているところの「真実」なんてものは、「砕け」と言いたい。砕けた心です。いつも自分が砕かれて進んでいかないと、何かそこに出来上がつてしまつて、

「あいつは不真実だ」

というようなことを言つて、人を審くことになる。

「俺たちは真実な、道徳的宗教的チャンピオンである」

なんて思つた連中を「パリサイ人」という。これはキリストが大嫌いだった。キリストの敵は罪びとではなかった。間違いを犯した連中ではない。外から見ると、みんな立派な人たちだった。パリサイ自身はそう悪くはない。相対的な世界では立派なんです。律法はよく守るし、よく知っているし、よく祈りもするだろうし、断食もするだろうし。見たところいかにも信仰的で道徳的である。けれども、それをサムシングにして、自分を義としている。自己義認。あのマタイ伝7章がそれです。

「己の目のうつばりを取らずして、人の目のごみを見ている」

と。「自分の目のうつばり」とは何かというと自己義認です。

「俺は善い。あいつはこういう欠点がある」

なんて、人の欠点ばかり見て、ことあげするような連中です。これが一番の罪なんです。最大の罪はこういった傲慢です。これは決して信じているのでも何でもありません。

「まこと」というのは、もし内容というなら、

「もう自分は何ものでもない」



という本当の自覚の世界にいけば、それが本当の「まこと」の姿になる。何でもキリストを見ればすぐわかる。イエスという人は、自分を全く無にしている。「私」のあるところには本当の「まこと」はない。無私の世界は完全に砕けです。もうこれを砕くことができない砕けの世界です。全然、凝り固まりがない。あるがままの、自分はこのようなものであるという、あるがままの自分を隠し立てなく神の前にさらけ出しているのが、「まこと」ということです。

「神さま、私の心の中はまるで雲が去来しているような、ご覧のとおりでございます。どうぞ、この雲の去来の奥に、去来しない世界をいただきたいものです」

というのが我々の本当の願いではないですか。

「雲が去来しても心配いらん。もうひとつ雲より上の成層圏の世界をお前にやるぞ」と、こういうことです。

いくら祓い清めたつてまた来ますよ、雲が。ああ今日は素晴らしい晴天だな、なんて喜んでいると、夕方になるとまた雲がやってくる。相対的な世界をどんなに整えようとしたつて、それは百年河清を待つが如しで、ダメであります。その変転極まりないところの、諸行無常であるところの中に無常ならざる世界を持つか持たないか。それだけです。エックハルトなんかもうそういう境地をちゃんと持っていた。もう少し、今のプロテスタントの人たちもこのエックハルトなんかをしつかり勉強するといい。中世の神秘家というと、なにかすぐ除け者にしてしまうけれども、冗談じゃない。彼らの中に大事なものがある。

●言霊ことだま

「来りて見よ」

という。これは非常にピリポがぶつかるものにぶつかりましたから。あなた方は、本当にぶつかるものにぶつかるためには、どこでぶつかるか。もう聖書の他にない。聖書66巻あるけれども、ぶつかるものにぶつかりたかったら、もう福音書に来るよりかほかにない。これはアルファにしてオメガである。聖書66巻からどれを選ぶかといったら、私はヨハネ伝を選ぶ。ヨハネはキリストの胸に寄り添いたる弟子であつた。ということは、ヨハネという人は本当にキリストの霊の中に、心の中に自分を、存在を置いていたような弟子であります。

パウロも選ばれた器です。ヨハネもまた実選ばれた器である。このパウロ、ヨハネ、ペテロという三人は実におもしろい。また、ヤコブというのもあるけれども、四本柱みたいに。パウロは信の人である。ペテロは望の人である。ヨハネは愛の人である。信・望・愛。ヤコブは行為的な人である。マタイ伝を書いたマタイは言といつてもいい。

「初めに言ことばあり。言は神と共にあり、言は神なりき」

という。言というものは非常に重んぜられているわけです。だから、ルターも一生懸命で「聖



書の言、神の言」なんて言う。プロテスタントは「言、言」といって、「言」に今度は囚われてしまった。三位一体というけれども、「神・キリスト・言」と言ったっていいくらいです。

「初めに言あり。言は神なりき」

なんて書いてある。ところが、「言」と言わないで、三位一体のときには、「霊」と言っている。これは注目しなければいかん。だから、ヨハネ伝の「言」というものは、絶対に「言霊」であり「霊言」であって、絶対に「霊」とは離すことはできない。クレメンスだったかな、一番先に

「ヨハネ伝がもつとも霊的な福音書である」

ということを書っている。そのとおりです。この「愛」だって、もちろん霊的な愛です。

ぶつかるものにぶつかるには、この福音書に来てぶつかってください。そして、キリストという、イエスというこの人間にぶつかって、

「この人には本当に参った!」

と降参する。世の中に東西古今にいろいろ偉大な聖人君子、偉人があるさ。けれども、キリストというひとは桁が、次元が違う。でありながら、見ていると何でもない人なんだ。そして別に神学的なむずかしいことも何も言っていない。譬話^{たとえ}では誰でもわかるようなことを言っている。けれども、その中に、汲めども尽くさざるところの真理が宿っている。意味ではなかった。今の聖書学者というのは、よく「解釈」とか「意味」とか言って困る。もちろん、そういう面もあるさ。けれども、もうハッキリと、

「わが言は霊であり、生命である」

とキリストがちゃんと書いている。ヨハネ伝6章かどこかで。自分の言は霊であり生命であって、この言の中にもうハッキリと生命がかかっていると。

私たちは文字を読んでいるけれども、実は文字を読んでいてはダメなんです。これは不立文字という言葉があるとおり。文字を読みながら、そこに発しているところの氣に触れないことには、この言葉に発する氣に触れないことには、その言葉が霊であり生命であることがわからない。受けとれない。

そういう言葉を発し、またそれが今度は行為となる。言と行とは同じことです。口から発するものは言だが、手足で発するものは行為なんだ。これはちゃんと同じところから出ている。言と行は別々だなんて思うからそもそも間違いだ。キリストの中にあるこの霊的な真理そのもの、生命そのものが、発しては言となり、発しては行為となるだけのなし。人間は、言ったことがさてどれだけ実行できるかなんて、そんなことをいつまでやったって、始まらない。奥の世界から起きなくては。どんなにそれが不完全であっても、破れていてもいいよ。問題は、その奥から来ているか。そういうような存在の根本からそれをぶちまけているようなのが「まこと」であります。



●我を見よ

このナタナエルというやつは、

「ナザレからそんなものが出てくるか」

なんて言つて、自分のあるがままのことをそこにぶちまけている。ピリポは、

「そんなことを言つても、それはそれでいいから、とにかく、お前は来てみる。こ

の人にぶつかつてみる」

と。話し合いもいいですよ。議論も、ディスカッションも。好きだね、今の人は。けれども、話し合いで落ち着いたところのものは大したことはない。話し合いよりも、気合でつかまえる方が本当の世界にくる。

だから、ヨハネも、ペテロも、パウロも、ある時には本当に「我を見よ」と言つた。

「来たりて見よ」

というけれども、もう自分たちはキリストの中に来てしまつているから――この時はイエスがいたから、「来たりて見よ」なんだけれども――「来たりて見よ」ということは、もうひとつ言えば、

「さあ、この我を見よ」

ということと同じことなんです。「この私を見てみる」と。「私を見てみる」というのは、たとえば私が言つたところで、人間小池なんてものを見たつてしようがないですよ。

「このダメなやつを通して、何が顕れているか、そこが見えるか」

ということが、それが本当の「我を見よ」ということ。

「我ならざる我を見よ」

ということ。「来たりて見よ」ということが言える実体につかつていなければ。だから、クリスチャンはすぐ聖書研究会だの何だのかんだのとやっている。けれども、本当に「来たりて見よ」ということの言える、

「福音書に来てみる、文句はないぞ」

というだけのことと言えるクリスチャンが一体幾人いるかというんです。それだけ、この福音書においてキリストにぶつかつているクリスチャンが幾人いるかと。

「クリスチャン、クリスチャン。キリスト教、キリスト教」

なんていうけれども。

私もし聖書が重くてしょうがなかったら、破つてしまつて福音書だけをポケットに入れて日本中を歩いたつて、話はできますよ。さすがに、塚本先生はとにかくイエス伝に生涯をかけてその研究をした。あの塚本先生というのは、私はその点で、狙いがよかったなと思つています。イエス伝については今まで出てきたうちで最高権威者です、その研究の面におきましては。どれだけ使徒たちと同じ角度からつかまえたかは別問題だけでもとにかく、打ち込んであれだけのことをなさつたということは見上げたことです。「来たり



て見よ」と。生涯、イエス伝研究に自分を打ち込んで悔いなきものであります。

どうぞ皆さん、私たちはこれをしっかり読んで、そして、もし記憶力のいい人なら、

「私はヨハネ伝を初めから終りまで暗記しますよ」

なんていうわけで、そういう志をたててやってごらんないよ。私は記憶力がないからダメだ。私は落第だけれども、記憶力のいい方はひとつやったらいい。坊さんがお経を読むようなぐあいだね。お経が要らんように聖書も要らんと。本当に祈り心地でそれを称えてごらん。それをやっているうちに、私がこんな話なんかしているよりもよっぽど打たれるだろうと思う。

皆さん、なにかこれはと言って、ひとつ自分の味を出してくださいよ。何でもいいから。なにもいわゆる参考書なんかを読めなくたって一向差し支えないから。聖書にぶつかって、自分は聖書のこういうことをひとつやりますよと。今度はクリスマスとか何かの余興のときに、そういうことをひとつやってもらいたいわけだ。何か聖書の中からつかみだして、そしてそいつを自分のものにする。とにかく、ただ漫然とやっていたらいかん。伝道するとかしないとか、そんなことはどうでもいい。本当に聖書を愛するというならば、愛し方がある。どのように私は聖書を愛しているかということを実行をもつて行う。そういうこともひとつの事実となるでしょうし。まあいろんな事実があるでしょうけれどもね。

●なんじは神の子なり

キリストはナタナエルというやつを見てすぐ、

47 イエス、ナタナエルの己が許にきたるを見、これを指して言いたもう『視よ、

これ真にイスラエル人なり、その衷に虚偽なし』

と言う。まあ私たちでも、電車の中で人の顔を見ていても、

「ああ、あれは良さそうな魂だな」

なんて思うことがあるよね――「あの野郎は」なんて思うこともあるし――ああいう人は本当にひとつ福音の世界に入れてやりたいなと思う。いきなり、創価学会みたいに話しかけるようなことはしませんけれども。とにかくなにか、

「神さま、伝えさせてください」

と祈って願っていけば、どんなチャンスがあつて、知らない人を、思いがけない人を救うことになるかもしれない。

48 ナタナエル言う『如何にして我を知り給うか』

「どうして、私のことをお分かりですか。そんなことを仰るけれども、なぜ、そんなことがお分かりですか」

と。ハッキリと、ナタナエルというのは自分の思っていることを正直に言った。

イエス答えて言いたもう『ピリポの汝を呼ぶまえに我なんじが無花果の樹の



『下に居るを見たり』

キリストが「見る」というのはちゃんと霊視しておられるわけです。それでナタナエルは驚いてしまった。見えるはずはないんだ。ところが、見てしまったと。無花果というのは、棕櫚と同じように平和の象徴の木です。

49 ナタナエル答う『ラビ、なんじは神の子なり、汝はイスラエルの王なり』

またナタナエルというやつは最大級のことを言ったものだ。

『なんじは神の子、イスラエルの王』

なんてことを告白したのは、ペテロがよつぽどあとになってからです。マタイ伝16章に出ているとおりイエスに、

『お前たちは私を何と思うか』

と聞かれた時に、

『あなたはキリスト、神の子です』

とペテロが言ったでしょ。そして、キリストはあの時に非常に喜んで、

『お前の上に教会を立てる』

と――あの「お前の上に教会を立てる」というのはキリストの言葉でないでしょうけれども――とにかく、ペテロというものを非常にその時に、

『これは神の示しによった』

と言われた。「キリスト」なんていつても、それは「メシヤ」として地上に王国を来らせるメシヤかとペテロは思ったわけです。せつかく神の示しによつてそういう告白したペテロに、

『冗談じゃない。お前が考えるような王国ではない。私は十字架にかかるんだ』

と言ったら、ペテロはイエスの袖を引き止めて、

『とんでもない、そんなことがあつたら大変です』

と言ったら、その次の瞬間に、

『サタンよ、退け!』

とキリストは言ったでしょ。人間というものは、神の霊にとらえられてみたり、今度はサタンの霊に捕らえられてみたり。ペテロというのはそのいい例だ。波のごとくだ。だから、ペテロは望みの人なんだ。

現実、私たちは良かったり悪かったり、波のようになる。けれども、やがて最後のときには必ず天界に救われるという大きな望みを持って進んで行く。これをペテロが表わしている。しかし、ペテロだつてもちろん、神の国が彼の中に聖霊によつて来てからは、彼は波でなくなった。彼は素晴らしいことになった。それまでは波だった。

このナタナエルのひっくり返った告白。彼は全く「来たりて見よ」というものにぶつかったわけです。ナタナエルはぶつかるべきものにぶつかった。ナタナエルは正直、自分の今



までの気持をすっかり捨ててしまつて、「あなたはひよつとしたら」なんて言つてやしない、
「あなたは本当に神の子であつて、イスラエルの王である」

と言つた。もちろん、「イスラエルの王」と言つたときに、このナタナエルの気持はやはりユダヤ人的な気持で、やがてエルサレムを中心とした王国ができて、世界に君臨するような王様のことを考えていたんでしようけれども。それとはキリストは違う。キリストは

「わが国はこの世のものならず」

と言われた。

今でもユダヤ人はこれに躓いている。まだ本当のイスラエルの王はやつて来ないと言う。ユダヤ人は相変わらず、イエスを十字架につけっぱなしである。あの十字架につけた人たちの味方になつて、イエスを信じていた者を迫害していたサウロが復活のキリストに打たれてひっくり返つた。彼が180度転向した。サウロはユダヤ人中のユダヤ人。それが180度転回して、そして

「本当に参つた!」

と。キリストの弟子になつて、最大の使徒になつて、あの地中海の当時の世界に大伝道をやつたわけです。それだけの事実があるのに、なおユダヤ人はこのパウロも認めないわけだ。だから、ユダヤ人の頑固さ加減というのはちよつと我々の想像を絶するものがある。どこまでも律法を立てている。実は律法は隠された福音であることがわからない。

●神の使

「神の子である」と言うところはよかつたけれども、「イスラエルの王」と言つたところが、実はやつぱり答案は半分しか及第していない。「全世界の救い主」とは言えなかつた。

50 イエス答えて言い給う『われ汝が無花果の樹の下におるを見たりと言ひし

に因りて信ずるか、汝これよりも更に大なる事を見ん』

「それどころのさわぎではない。それだけの徴でお前は信じたけれども、これからいくらでも神の事態が私を通して証明されていくから」

というわけです。

51 また言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、天ひらけて人の子のうえに神の

使たちの昇り降りするを汝ら見るべし』

さあ、不思議なことを言われた。「天が開けて」と言つたつて、これは普通の人にはわからん。すぐ近代人はなにか自然科学的な天を考えるから。「人の子」とは即ち、ダニエル書で言っているところの「キリスト」の隠された言葉です。「神の子」というと、キリストは非常に伝道に妨げになるから、自分でも「人の子」と言われたわけです。「神の子」と言つたその言葉に対して、キリストはこの時には何も言われなかつたけれども、マルコ伝5章のところで、悪鬼につかれたやつが



「あなたは神の子だ」

と言ったら、

「私を顕すな」

とキリストは制された。悪鬼というやつは霊的なやつだから「神の子」がわかるんです、自分の敵だから。

「天ひらけて人の子のうえに神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし」

と。「天使」ですな。この言葉をみるとすぐ私たちは思いだすのは創世記28章です。

「10ここにヤコブ、ベエルシバより出たちてハランの方におもむきけるが、

11一処にいたれる時、日暮れたれば即ち其処に宿り其処の石をとり枕となして其処に臥て寝たり。

讃美歌の「主よ御許に近づかん」というのはここから来ている。

12時に彼夢て梯の地にたちいて其の巔の天に達れるを見又神の使者の其れにのぼりくだりするを見たり。

もちろん、キリストはこれを知っておられる。天の使いが上り下りする。ドイツの学者というものは、「これは梯子を天使が上り下りしたのだから、この天使は羽がなかったのだろう」なんてくだらないことを言う(笑)。ドイツ人というのはすぐそういう分析的な判断をする。そういうようなことは、我々は思いもよらない。

13エホバ其の上に立ちて言いたまわく、我は汝の祖父アブラハムの神イサクの神エホバなり。汝が臥すところの地は我これを汝と汝の子孫に与えん。14汝の子孫は地の塵沙のごとくなりて西東北南に蔓るべし。また天下の諸の族汝と汝の子孫によりて福祉をえん。

幸いの基となるという。

15また我汝とともにありて凡て汝が往くところにて汝をまもり汝をこの地に牽返るべし。我はわが汝にかたりし事を行うまで汝をはなれざるなり。

素晴らしい、神さまの守りである。

16ヤコブ目をさまして言いけるは、誠にエホバこの処にいますに我しらざりきと。17すなわち惶懼ていいけるは畏るべき哉この処これ即ち神の殿の外ならずこれ天の門なり。」(創世記28・10～17)

天門です。天使というものは、聖書には旧約にも新約にもちよいちよい出てきます。なにが霊的な実在者であって、神のことを告げ知らせる、正に使いです。ヘブライ語で「マラーク」という。「マラキ書」の「マラキ」というのは「天の使い」という字です。エンジェル、アンゲロスという。天使はキリストに仕えている。マタイ伝18章に非常に著しい言葉がある。

「10汝ら慎みて此の小さき者の一人をも侮るな、我なんじらに告ぐ、彼らの御



使たちは天にありて、天にいます我が父の御顔を常に見るなり。」(マタイ18・10)

小さい子どもに守護天使というのがあるんだ。我々も、天使が守ったりしているわけです。いつか、この集会でも素晴らしい霊的な現象が起きたことがある。クリスマスの時でしたけれども、集まって来た人たちの後にみんな二人ずつ白い羽の天使が立った。私は壇上にいたものだから、七人の天使が守っていたそうです。そのことを見たひとがある。私は何もわからないんだけど、とにかく我々の現代におきましてもそういった事態が、ある人には祈りの世界で映ることがある。決して、考えられて想像されたものでないことは聖書が証しするとおりです。仏教の世界でも、あります。

守り、天使というようなものがある。ゲートも『ファウスト』の始めの方で――これはヨブ記から来ているのだけれども、ヨブ記の始めに出てくる――サタンと対立するものとして天使がいる。エンジェルはデーモンに対立するわけです。悪霊に対する善霊だな。「ラファエル」とか、「ミカエル」とか、「ガブリエル」とかいうのがある。ああいうのはペルシヤの宗教にもある。「ミカエル」というのは聖書にも出てくる。「誰か神の如くあらんや」という名前です。

イザヤ書6章に「火焰天使」「セラビム」が出てくる。天使たちが舞いながら歌っていると書いてある。イザヤが召命を受けるところです。預言者は大抵そういつたある霊的な現象にぶつかっていますけれども。

「ウジヤ王のしにたる年われ高くあがれる御座にエホバの坐し給うを見しに、その衣裾は殿にみちたり。²セラビムその上にたつ、おのおの六つの翼あり、その二つをもて面をおおい、その二つをもて足をおおい、その二つをもて飛翔り。³たがいに呼びいけるは、聖なるかな聖なるかな聖なるかな、万軍のエホバその栄光は全地にみつ。」(イザヤ6・1～3)

あげきたればきりがないほどあります。イザヤ書37章36節には、

「³⁶エホバの使者いできたりアッスリヤの陣営のなかにて壹拾八万五千人をうちころせり。早晨におきいでて見ればみな死にてかばねとなれり。」(イザヤ37・36)

戦場で突然驚くべき疫病にみなやつつけられてしまったわけです。イザヤが、すっかり神に祈っておれとヒゼキヤに言って激励し、アッスリヤ軍の囲みをしてしまった。一夜にして彼らは殲滅的なことになってしまった。これが、

「エホバの使者いできたり」

ということ。即ち、イザヤが示され、そして、使者がそのようにして神の力を告げ知らせているわけです。これも著しい例です。サムエル後書24章15節にも、

「¹⁵ここにおいてエホバ朝より集会の時まで疫病をイスラエルに降したもう。」



ダンよりベエルシバまでに民の死ぬる者七万人なり。¹⁶ 天の使その手をエルサレムに伸べてこれを滅ぼさんしたりしが、エホバこの害悪を悔いて民を滅ぼす天使にいたまいけるは、足れり今汝の手を住めよと。時にエホバの使はエブス人アラウナのうち場の傍らにあり。¹⁷ ダビデ民を撃つ天使を見し時エホバに申していいけるは嗚呼我は罪を犯したり。我は悪しきことを為したり。然れどもこれらの羊群は何を為したるや。請う汝の手を我とわが父の家に對たまえと。」(サムエル後書24・15～17)

ここも非常に著しいところです。こういう天的な實在がそういうように現われる。

●靈的な現象

今の人にはなかなかこういう現象は分からない。もろもろの靈があります、善き靈と悪しき靈と。そして、天使もまたそういった意味におけるひとつの靈的な存在であるということには間違いがない。

今の医学というものには、ひとつの非常に片手落ちな角度が確かにあると思われる。何でも福音書の靈的な事態に對して、病の事態をいわゆる精神病とだけ、人間の精神の何かまちがった状態としか、今の科学の世界では判断できないんだけれども、実は――これは無門関の中にもあるけれども――靈の世界では實在しているんです。だから、パウロには、

「空中を司るところの悪しき靈と戦う」

と書いてある。キリストもサタンと一騎打ちしました。エゼキエルも――これは悪しき靈ではなくて善き靈ですけれども――導かれて、死骨のバラバラしている所に連れて行かれて幻を見させられた。悪しき靈が地上に働いて、病にかかったり、災いにでつくわしたりする。そのことのむしろ非常に大きなパーセンテージが靈的な現象からきていることが全然分かっていないわけです。私はもつとそういうことに対して祈りを深めて少し知りたいと思う。どうしてあの人がああいう病氣にかかったんだろうか。ちよつと物理的には想像できないようなことがある。また、どうしてあの方は治ってしまったんだろうかと。それは医学的にもわからない。

現象は分からなくてもいいんですよ。問題は、キリストは、言うまでもなく、天使以上であります。いわゆる

「天使を拝むことはいかん」

ということとはパウロもちゃんと言っている。天使はもちろん使いである。天使はむしろキリストに仕えているんですから。私たちがキリストにしっかりと御霊をもつて直結するならば、自在にキリストは天使をつかつて、私たちの知らないまに守ったり、告げたりするでしょう。

あのキリストの誕生の時もそうですね。ヨセフなんていうのはもしエジプトにイエスを



連れて行かなかったら、イエスは殺されてしまう。やはりこれは示しを受けて、ヘロデの兵隊の分らない所を、すーつとエジプトの方へ行ってしまったでしょ。あれはみんなそうなんです。

天使の使命、使いということをよく表わしているのはヘブル書です。1章13、14節に、

「¹³又いずれの御使にかつてかくは言い給いしぞ『われ汝の仇^{あだ}を汝の足台とな

すまでは、我が右に坐せよ』と。

「われ汝の仇^{あだ}を汝の足台となすまでは、我が右に坐せよ」という言葉はキリストに神さまが言われた言葉である。天使にはそんなことは仰らなかった。

¹⁴御使はみな事^{つか}えまつる霊にして、救を嗣^{つとめ}がんとする者のために職^とを執るべく遣わされたる者にあらずや。」(ヘブル1:13、14)

我々に対しても天使はキリストの使いとして遣わされてあるので、天使を拝むようなことをしてはいかんといい。カトリックの方では、いわゆる守護天使、守護神なんていう。あるいは聖者を――「拝む」とは言わないですよ、カトリックでも――崇拜すると言っている。へたすると、拝みの方になってしまって、マルチン・ルターが修道院に入るときに誓ったのも、ちよつと守護神に対する多少拝み式なところもあつたようですけれども。

我々が拝する対象はキリストだけです。神だけです。そういう意味において、天使というものが遣わされる。また我々を守る。悪霊に対しての守りもしてくれらるということはあるけれども、そういうことはしなくていい。もし、時にそういったことの示されて解る方は、またそれはそれでいいだけのことはなしです。

●無即無限

「天使が上り下りするのを見るだろう」

と。即ち、キリストは霊界の王者でありますから、悪霊もちゃんとわかる。悪霊に憑かれたやつから悪鬼を追い出して、「豚の中に入れ」という、あの「レギオンの話」がある。あれを神学者は解説して、なにか比喩的なように考える。しかし、あれはみんな事実です。他のところにうろいついたら大変ですから、豚と共に滅ぼしてしまった。豚は犠牲になつてしまったけれども。

憑^{ひょうれい}霊現象なんてあるね。霊に憑^つかれる。そういうことだつてあるんですよ。そういう時には、苦しんでいる霊を慰めてやる。私もちよつとそういうことに一遍でつくわしたことがある。お母さんの霊がその娘のお腹の中に入ってしまったって、妙な声を出す。その人は非常に病気がおかしいわけです。そういう霊に呼びかけて、キリストの名において、

「どうぞ安心なさい。この子どもはキリストの救いに与つて、だいじょうぶ、ご心配いりませんから」



と言って、そのお母さんの霊を出してしまった。そういうような現象は、まああまり探求することもないですけども。とにかく、霊界はさまざまでありますので、「百鬼夜行」とかいわれるように、いろんなものが今、この地上において働いて、人間を操っているということはどうも事実です。だから、問題は最高の霊、キリストに直結すれば何もこわいことはない。

人を藁人形で呪うやつがある。呪われて、「痛い、痛い」なんて言い出す人に私はいつかぶつかったものね。キリストに祈ってあげたら、それが抜けてしまって、呪った方がむしろ倒れてしまった。私は何もわからなくなっていた。問題は、本当にキリストだけにぶつかって、この力の中に入ることです。

聖書は力の世界ですよ。力と言ったって、腕力という意味ではない。正しき愛の救いの力です。私たちが、「信仰、信仰」と言ったって、この愛と救いと光の中に――何と言おうといいですが――そういう善き神の力、キリストの力の中にいなくては。

「福音は言葉にあらず、力なり」

とパウロが言っているとおりの。自分は無力ですよ。

「我弱きときに強し」

とパウロが言ったのはそのことです。自分は無力である。自分が

「ひとつ霊的な力を得ましょう」

なんてやったら、とんでもない。そんなことをしているとサタンになってしまう。自分は無力で結構です。どこまでも平伏しのままです。しかし、驚くべき無限力がある。無限力がキリストでありますから。

キリスト自身がそれであつたんだから。地上で彼は無力であつた。ところが、地上で彼は無限力であつた。無即無限ということをはッキリ、キリストは実証しておられる。私たちも、自分は無力で、キリストにおいて無限の力が流れてくる事態に質的に入ってくれば、何もこわいものはない。囚われなくなる。楽なものです。そういう非常に自由な楽な、そして八方破れで、どっこい何ものもこれを倒すことができないという――皆さん一人ひとり、とりが老いたる者も若きも男も女もみんなそうです――信仰の世界でそこに入らなかつたらつまらんよ。そうしたら、

「ああ、天使が守ってくれているでしょう。わかりませんが、結構です」

と。いいですよ。問題はキリストと直結してその生命の中に本当に生きること。それは知恵でもあり、光でもあり、愛でもあり、何とでもある。およそ善き一切の徳目が自由自在に展開する世界です。

「一如の世界から無限の展開をしていく」

と申し上げている通りであります。



●天門

これが即ち——キリストに私たちがそのまま投げかけていけば、十字架でもうちゃんと門は開かれているんだから——天門です。

「ここは門であつた」

とヤコブが言った。「大道無門千差道有り」という。よほど門は見えない。カトリックの門、プロテスタントの門、武蔵野幕屋の門なんて言つて、ひとつひとつの門なんかを考えていたら、本当の門ではない。門なんかありません。けれども、無門のところに、至るところに天門が開かれている。

「無教会」と言っているけれども、無教会と言うならば、なぜもっと徹底しないかというんだ。無教会というものに執っているから、私は

「無教会主義なんていけませんよ」

と言う。無教会というなら、本当に「無の教会」と言つたらいいではないか。無教会というなら、無の教会だ。

「その本質は無というエクレシヤであるぞ」

ということに本当に徹すれば、これはもう聖霊の世界に入らざるをえないんです。ところが、無教会がどうもそれからはずれている。(藤井武先生の文章の引用朗読、一部省略)

「……例えば源信または法然たちを見よ。彼らは言つた、ただ何ごとも浄土にてこそと。

うらやましいかなる空の月なれば心のままに西へ行くらんと。彼らはひとえに直感し希望した。彼らの国はただ西方浄土にあつた。ああ、東洋よ、東洋の日本よ。源信、

法然、親鸞の子孫よ。世界は今や汝を要求しつつある。第四文明は汝の手によって起こらんとしつつある。神の国の真理は汝の開拓によって全うせられんとしつつある。

望むらくは神の付与し給ひし汝の旧き特性に目覺めて、今より高く来世永遠の光明を点じ、もつて万国の民を大いなる希望の生活に導かんことを。」

というのでありますが。この藤井先生もその見当付けはよかつたんですが、さてその中心は何であつたかということの問題がまだ残されていたわけです。即ち、この「来世永遠の光明」といいますけれども、そして「直感の世界」というけれども、その「来世永遠の光」「直感の世界」——むしろ内観と言いたいんですが——その内観的な光の世界は、これはもう霊の世界で、聖霊を受けなければこの世界は出てこない。

私がとにかく藤井先生の弟子で——先生のこの文章を見たから私はそう言つたわけではないけれども。自然に示されてきたんですけれども——無教会ではどうしても、この聖霊の事態が一手手前である。また、教会にしてもそうなんです。ヨハネは水でバプテスマを施したが、今でも相変わらず洗礼は水でやっている。

要するに、聖霊のバプテスマをキリストから直接に一人ひとり——私は何も洗礼なんかやりはしない——御霊の洗礼を十字架の下で本当に受けるまでは、本ものではない。こ



これが無教会が前進しなければならないポイントなんです。

それが本当の天門なんです。この聖霊を受けた天門には天使が上り下りするんです。そういう聖霊のバプテスマという視線で、

「われキリストと共に十字架せられたり、もはや我れ生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生き給うなり」

という、その

「キリストわがうちに在りて生き給うなり」

はもちろん御霊のキリストであります。あるいはキリストの御霊と言ったって、どつちでもいい。無教会は、「わがうちに生きる」というこの現実を、この関門を突破しなければいけません。本当の大道はいわゆる人間の門ではないぞと。「千差道有り」という。どこでもよい。この関を透得すれば」という。即ち、無門関の「この関を」というのは、十字架、という関門を透得するならばということです。

十字架という門を突破していく。これは誰でもが通れる。キリストにあるがままでぶつかると、そのキリストは実は十字架のキリストである。そうしたら、もう自分というものが全部そこで碎かれていることに気がつく。自分では碎かれませんよ、いくら碎いたって。碎かれている自分に気がついたら、それからくるものはこの聖霊の光であり、この生命である。十字架を仰ぐのではない。信じ交わっていないければダメです。「しんこう」とは「信交」と書かなくては。

●来りてわがうちなるキリストを見よ

そして、次の世界でもうこの現実の中に、本当に聖霊の現実に入る。これが最後に日本人が福音の世界でやり遂げなければならないことだ。もちろん西洋にだってそういう人はいますよ。けれども、今はヨーロッパの神学やキリスト教が――私は正直言つて――ある行き詰まりを来たしている面が非常に多いわけだ。隠れたる人たちはもちろんいますよ。けれども、無教会が行き詰まりで、

「無教会主義、主義」

なんてやっているから、「ナイン、そうじゃない」と私は言う。私は一人、アウトサイダーになつてしまった。

内村鑑三先生がソートンとかいう霊的な牧師の話聞いて、先生は驚いた。こういう牧師さんなら幾人来てもいいと。先生が驚いたということは、先生がやはりその点でまだちよつと手前の面が強かったということだ。先生に聖霊が来てないとは言いませんよ。そこを我々が前進して進んで行かなければ、「内村鑑三、藤井武」なんてしょっちゅう今言つていてもしょうがない。私たちはその死を乗り越えて進んでいく。



「そうだ、お前たち、それが本当の私たちの願いである」

と、内村先生も藤井先生も言っているだろうと思う。天界における先生たちがそう言わないことはないわけです。我々は必ず、皆さんが何をしていらつしゃつても、この証者です。御霊の、本当に元始の福音の、使徒たちの信仰の証者です。質的には絶対に同質の質の世界に入る。ホモウジオスである。

「神―キリスト―聖霊―我―」

という、四位一体ということを誰も言わんけれども、我々の信仰の現実がこの四位一体的な世界に入る。もちろん、我々そのものは現状においては罪びとにすぎません。けれども、この福音の世界に入れられて、

「汝らは世の光なり」

と。まあ、「少しは光である」なんてキリストは言いやしない。キリストはものを水割つて言わないですから。

「お前たちは世の光だよ」

「はい、あなたの光がくれば、光であります」

と答えられなければダメなんです。自分自身が手放して光になりはしませんよ。聖霊という光体が宿ったら影がない。形には影があるのだが、光を宿した世界には影がない。

いろんな新興宗教が出て、よく光のことを言いますよ。それぞれ体験しているから、あの言っていることは決して偽りではない。けれども、問題は本当に十字架を通ってないと、光の世界に霊的に入ると、へたすると霊的傲慢になる。そのことは福音の世界では絶対にありえない。十字架に贖われたる者で、私が光ではないんだ。私の中にキリストの光がありたもう。

今日は向日葵^{ひまわり}がちょうど出ているが、向日葵というのは太陽の光を受けてこんな素晴らしい姿になっている。向日葵は何でもない。太陽の光がこのようにしてこの草には現象している。私たちがちょうど向日葵のようなくあいになる。そこらのとは質がちがう。

そのときにはじめて、

「その中に偽りなし」

ということになる。自分を言っているのではないんだから。キリストを言っている。キリストを告白している。そして、キリストのこの恩寵の事態、無条件の福音の事態を全存在をもって告白する。そこには偽りなんかありません。私自身がこうである、ああであるなんて、そんなことは私はひとつも言いません。私自身なんてものはどうだっていい。我々は知らないまにキリストの姿に次第次第に化せられていく。

「恩寵より恩寵に至る」

とパウロが、

「恵みより恵みへ至る」



とヨハネも言っているとおりです。

そうすると、知らないまに、「天使が上り下り」しているような存在になってくるわけです。だから、なるほどこういうようにして、「来たりて見よ」と。本来に来たりて見て――今度はただ見ているだけだったらダメだ。外から見ただけでダメだ――内観する世界です。来たりて内側からキリストを見ている。内側から告白している。来たりて見たらば、その相手と同じ世界に入れられてしまう。

私たちは星を見ているけれども、銀河系の中で太陽系があつて、その中で見ている。「あ、銀河はいい」なんて言つて見ているけれども、実はこれは銀河を内観している。天の川を見ているのは、銀河系の宇宙の中で内側から見ているわけだ。そのようなくあいに、我々は実はもうキリストの中で見ている。その光によつて光を見る。太陽の光によつて私たちはこの光を、物体を見ている。太陽の光がなかったら、ものが見えない。いわんや、キリストの光を受けなかったらば、本当にものが見えない。いや実に、キリストの顧みです。我々が見えるのは、このキリストの驚くべき本願の顧みのゆえにぶつかつて、その存在にぶつかつて、はじめて見えるのでありますので、どうぞ、皆さんは、求める人に、

「来たりて見よ。福音書に來たりて、見よ。そして、いや実に我を見よ。來たりて、我を見よ」

と言わなくては。

「来たりて、キリストを見よ」

から、

「来たりて、我を見よ。わがうちなるキリストを見よ」

と。何もそんなことは言わなくなつていいけれども、それだけの、

「何かしらんが、あの人はちがうな」

ということが、無言の言としてあるわけです。それがこのヨハネ伝の大変素晴らしい今日のところですよ。

